

Ⅱ

ヘンリー・F・グラフ著、有賀貞、松田武、中里明彦、平野孝、青木怜子 訳

『アメリカその人々の歴史』Ⅰ・Ⅱをめぐって、 一アメリカの高等学校教科書にみられる自国史像

鵜 月 裕 典

(1)

いうまでもなく、わが国の学校教育においては、1872年の学制公布以来教科書は極めて大きな位置を占めてきた。戦前の国定化の下で教科書が国家統制の手段として機能した時期はもとより、現在でも検定制度を軸とする中央集権的な教科書行政の中で、学校教育法によって教科用図書の使用が義務づけられ、好むと好まざるとに拘らず教科書は授業の中心に据えられている。一方、全国レベルでの学習指導要領や教科書使用の法的強制が存在しないアメリカ合衆国では事情はどうだろうか。1977年以来日米両国の教育研究者・教科書編集者が協力し、両国の社会科教科書改善のための共同プロジェクトが実施されたが、その合同報告書は「アメリカの社会科の授業は大半は教科書中心に行われている。社会科の教師が作成するテスト問題もたいてい、カリキュラムの手引きにのっている学校の教科目標よりも、むしろ教科書に出ている知識に関する問題で占められている。補助教材、教育テレビや商業テレビ、地域社会の資料などが使われることはむしろまれのようなのである。したがって、アメリカの社会科の授業の性格は概して教科書に大きく左右されるといえる」として、合衆国でも教科書が授業の中で中心的役割を果たしている点を強調している。⁽¹⁾

本稿は合衆国の中等教育における自国史の教科書が、どのような内容をもちかかなる問題点を有するかを検討することを目的としている。もとより教科書が学校教育全てを決定する訳ではないし、実際の授業では教授法の問題も看過できない要素であろう。しかし、わが国同様合衆国においても教科書が授業の性格に大きく影響するのであれば、まず教科書自体を吟味することが、合衆国の歴史教育や歴史研究

と教育との関係を考察する出発点といえよう。蓋し、教科書特に自国史の教科書は、それを作り与える者（国家であるか否かは別として）が与えられる者に期待する歴史理解や社会意識の理想像ないしはその変化を映しだす鏡だからである。本稿では具体的な検討対象として先頃邦訳をみたコロンビア大学教授ヘンリー・F・グラフのハイスクール用教科書『アメリカ — その人々の歴史 — 』Ⅰ・Ⅱ、を取りあげるが、その前に合衆国の教科書の一般的問題に若干言及しておく必要がある。⁽²⁾

(2)

先にも述べたように合衆国では全国レベルの学習指導要領や検定制度は存在せず、教科書の作成や採択のシステムはわが国とかなり異なっている。合衆国では概ね州の権限によって教育行政が行なわれており、教科書の採択は州内の各学区が州認定の教科書リストから選択するという例が多い。しかし、これが必ずしも一般的という訳ではなく、州や学区によりその方式はまちまちである。このことは教科書の作成に大きく影響する。つまり教科書出版会社は各州・各学区の地域性を分析し、各々の要望する教科書を準備しなければならないからだ。同時にアメリカ在郷軍人会から公民権団体に至る各種の民間団体も常に教科書に注目しており、出版会社はその点にも留意せざるをえない。つまり、極めて乱暴に言えば合衆国では様々な世論の動向によって教科書の売れ行きが左右され、従ってその内容もまた規定されるのである。

合衆国の自国史教科書を歴史的に検討したジャーナリスト、F・フィッツジェラルドはそうした現状を次の様に述べている。「教科書会社や教育委員会が執筆者に彼らなりの自由なやり方で書くのを認めなくなったのである。今日、教科書は逆というかあと先になったというか、つまり一般大衆の要求に始まり、歴史家の手によって終わるという書かれ方をする」。大多数の教科書の表紙には著名な歴史家たちが名を連ねてはいるが、もはや教科書は「書かれる」ものではなく、複数の手が加わっての「妥協の産物」となっているというのである。⁽³⁾

実際どのような形で機能しているかは別として、例えばH・グラフ著の教科書では「原稿に様々な示唆と吟味を加える」ため、現場の教師から教育心理学者、南部史の大家V・ウッドワードに至る11人もの顧問が置かれている。具体的な作成過程

を知ることは難しいがこうした顧問制に加え、苛烈な市場競争に打ち勝つため編集側が執筆者に様々な規制をかけることも想像に難くない。様々な世論の動きに迅速に対応するため、出版社は独自の調査員を置いているし、実際教科書改訂のスピードは年々早まる傾向にある。グラフ著の教科書も1967年の初版発行以来、翻訳された1980年版で既に4版目である。

しかし、こうした状況が顕著となったのは1960年代以降のことだった。1950年代までの教科書は概ねWASP中心史観と狹隘なナショナリズムに貫かれており、そこに描きだされる合衆国の歴史像は完全無欠であった。再びフィッツジェラルドの言を借りれば、教科書において合衆国は「世界で最も偉大な国」「民主主義、自由、技術の進歩まさにその具現者」だったし、「（独立）革命以来守り続けている価値観や政治体制はつねに安定しており、重大な変化は起こらなかった」のである⁽⁴⁾。しかし、1960年代の「貧困の再発見」や公民権運動の高揚、ベトナム反戦運動に象徴される社会状況の変化の中で、それまで教科書を貫いてきたアメリカ社会の同質性というイメージはまさに革命的に転換することになった。黒人を筆頭に原住民アメリカ人たるインディアン、スペイン系アメリカ人、女性、若者等様々な民族集団、社会集団が社会内での自らの正当な位置を求めて立ち上がり、教科書も当然のことながら書き換えを迫られたのである。

その結果少なくとも教科書叙述の量的側面において、かつてのマイノリティたちの立場は改善される方向にむかった。しかし、それでは現在の教科書はかつてのWASP史観と狹隘なナショナリズムにかわる歴史像を提示しているのだろうか。こうした点も含め、現在の教科書の検討へ移ることとしたい。

(3)

グラフ著『アメリカ — その人々の歴史』Ⅰ・Ⅱは全体で8つの部から成り、各部分は3つないし5つの章に分けられている。邦訳では第1～5部が第1巻に、それ以降は第2巻に収められているが、一応章別構成を示せば、第1巻は第1部「アメリカとの対面」、第2部「海岸地方への新来者」、第3部「自由のための闘い」、第4部「新しい国の形成」、第5部「セクション間の紛争」となり、第2巻は第1部「南北に分かれて闘う国民」、第2部「試練にあう民主主義」、第3部「確かな発展と不確かな未来」となる。

先にも引用した日米社会科教科書プロジェクトの合同報告書は、わが国の教科書と比較した場合合衆国のそれがボリューム、カラフルなデザイン、記述内容の豊かさと多様さといった点ですぐれているとし、学習意欲を刺激するため、ケーススタディや設問を採用していることを評価しているが、⁽⁵⁾本書を見る限りそうした評価は正当なものといえよう。実際はほぼ各ページ毎に美しい写真や絵が収められており、生徒は本文を読むよりもまず、それらを眺めるのに忙しいだろう。また、各部・各章のはじめと各節のおわりに簡単な設問が用意され、各章のおわりには問題点の把握、主題の推理、比較と理解、さし絵の観察などの問題を内容とする「学習の手引き」が配置されている。さらに可能な限り様々な史料が挿入されており、総じて生徒に考えさせることに主眼を置いた教科書ということができよう。

訳者はその「まえがき」において、「本書はそれぞれの時代の叙述のなかで、黒人をはじめとする少数民族・宗教集団への配慮を示すとともに、女性の生活、女性の貢献、女性の権利のための運動に言及することに注意を払っている」「本書の内容にはアメリカの過去を美化するようなところはない。アメリカ民主主義の理念は讃えられているとしても、理想と現実との隔たりは常に事実として明らかにされている。」と述べておられるが、本書を一読して評者もこれとほぼ同様の印象を当初はもった。例えば日系アメリカ人の強制収容所の叙述にあたっては、「キャンプに送られたおよそ3分の2の人々が合衆国の市民であった。その多くが大統領の行った行動のため、家を失い、仕事を失った……日系アメリカ人が戦時中に受けた待遇は、明らかにいわれないものであった。」と記述し、「まるでスーツケースのように荷物を付けられ、収容キャンプに送られる日系アメリカ人の子供」という説明付きの写真も掲載されている。⁽⁶⁾

この例も示すように本書は確かにマイノリティへの言及にかなりのページを割いており、黒人にしろインディアンにしろ言及される個所はいずれも30を下らない。例えば本書の特徴の一つは新大陸の探検・征服に比較的大きなスペースを割いている点だが、それに関連して白人到来以前のインディアンについてもその生活様式に言及している他、再三にわたってインディアンの土地所有概念がヨーロッパ人のそれと大きく異なる点を強調している。また、ジャクソン大統領による強制移住政策をはじめとして、白人がインディアンに対してなした所業については努めて率直な叙述を試みている様にみえる。

しかし、総じて言うならインディアンについての扱い方は基本的には白人中心のものである。例えば、1812年戦争を記述した部分には次のような個所がある。「1814年のうちにアンドルー＝ジャクソンの率いるフロンティア出身の部隊はアラバマでクリーク＝インディアンを破っていた。クリーク族はイギリスの同盟軍であった」⁽⁷⁾。詳述は避けるが、さしあたってこのいわゆるクリーク戦争がインディアンの側からみれば白人による土地奪取や文明化政策に対し自らの土地と文化を死守する闘いを意味したこと、ジャクソンが夥しい数のインディアンを虐殺し広大な土地を詐取したことの二点を指摘しておこう。さらに、1675年のフィリップ王戦争＝メタカムの戦いの「彼らは入植者たちによって土地を追われることを恐れた。酋長たちは彼らの部族民が生活の基盤を失うことになるのを強く憂慮した」⁽⁸⁾という記述についても同様のことが言えよう。この戦いが「たんに土地を守るためではなく、自らの文化と伝統を守るための、『イデオロギーの生存のため』（V・デロリア）の戦いの先駆であった」⁽⁹⁾ことは看過されているのである。また、本書は南北戦争以降の叙述がそれ以前に比して短いではあるが、それにしても19世紀後半以降のインディアンについての言及は少なすぎよう。「インディアンの土地をめぐる戦争」という小見出しの付された個所でシャイアンやスー族の武力抵抗にふれた後は、オクラホマ競争との関連で「西部のインディアン保留地、1875年」と題された図が一葉掲載されて、叙述は現在へと飛ぶ。ちなみにその個所では「インディアンは、長いこと第二級の市民として扱われてきたいまひとつの少数民族集団を構成した。100年以上もの間、保留地に住んできた彼らの問題は、インディアン民生局で扱われてきた。そのころには、インディアンはすでに彼らの土地の多くを失っていた。そして彼らのほとんどは貧しくもあった」と記されている。⁽¹⁰⁾カスター將軍率いる第7騎兵隊の全滅は記されても、ウンデッドニーの虐殺、ドーズ一般土地割当法、インディアン・ニューディールなどについてはなんら明確な言及のないことは指摘しておく必要がある。

1950年代の教科書がインディアンに言及することすら稀であったことを考えれば、それでも本書は評価に値するのかもしれない。しかし、問題は叙述量の増加がその質の変化を伴っているかどうかであり、以上のインディアンに関するささやかな検討からは先にあげたWASP史観にかわる歴史像は必ずしも明確にはならない。

それではWASP史観と並ぶもう一つの問題、狹隘なナショナリズムは解消され

ているのだろうか。ベトナム戦争をめぐる記述を検討してみよう。幸いなことにフィッツジェラルド著『改訂版アメリカ』が本書の1967年版及び1972年版における関連箇所を引用している。まず1967年版ではベトナム戦争記述部分は「ただひとつ確かなことがある。この残酷な戦いにおいて、アメリカと南ベトナムの連合戦線が戦場で膠着状態になっても、アメリカは彼ら1400万の南ベトナム人を見捨てなかったのである」と結論づけられている。ところが1972年版では「戦火はおさまらない。しかし、アメリカは少なくとも戦争から手をひいている。この12年間で初めてアメリカの兵隊が死にさらされない時が訪れたのである」⁽¹⁾と書き換えられ、さらに本書（1980年版）では「（1973年）3月末には、最後のアメリカ軍が南ベトナムを離れ、ここに合衆国史においては最も長い戦争が終結した。その戦争で56000人以上のアメリカ人が生命を失い、30万人以上が負傷した。しかし兵隊が帰還するにともない、アメリカ人は東南アジアでの戦闘で受けた傷をいやすのに懸命となった。」「そして1975年はじめ、共産軍は南ベトナムのおよそ3分の2を制圧した……共産主義者たちは、南ベトナムと、カンボジアおよびラオスも同様に制圧した」となっている。⁽²⁾

1982年ハイスクール用教科書10冊のベトナム戦争記述を調査したD・B・フレンジングとR・J・ナースによれば、近年の教科書のベトナム戦争記述はより客観的より正確になってきており、ナショナリスティックな偏見は減少しつつあるという。⁽³⁾確かに本書も参戦賛成派の意見と同時に反戦運動や憲法修正第26条について言及しているし、トンキン湾事件に関しても「北ベトナムがアメリカ船を攻撃したのではないという証拠がでてきた」と述べている。従って、正確さや客観性という点では評価しうる面もあるが、依然としてベトナム戦争は「自由世界を指導する合衆国」という節の中に位置づけられているし、戦争目的については明確な指摘はないものの「合衆国は以前から、共産主義者たちが東南アジアを征服することを恐れていた」という記述がみられる。また、ソンミ村虐殺事件についてはなんら記載されていない。米西戦争や冷戦期についての叙述もあわせて検討してみると、自国中心的な観点が払拭されているとは言い難いだろう。しかし、ベトナム戦争期におけるジョンソン、ニクソン両大統領を含め、歴代大統領の採った対外政策について、必ずしも全般的とはいえないまでもその政治的判断の是非を問題にしている点、あるいは、「東南アジアでの長い戦いは、外国での出来事がいかに深く彼らアメリカ人の生活

に影響し、変容させてしまうかを再び見せつけた」という記述⁽¹⁴⁾さらには先にみたベトナム戦争記述の変化は、徐々にではあるが国家の対外政策を絶対視し正当化する傾向が転換しつつあることを窺わせているといえよう。

(4)

本書の最終部は先に述べたように「確かな発展と不確かな未来」と題されている。さらに最終節「21世紀に向けて準備する国民」の冒頭には「国内における出来事もまた変化をもたらした。これらの変化が、将来はいったい何をもたらすのであろうか、という疑問を多くの人々にいだかせる」と記され⁽¹⁵⁾、ページを繰ると社会保障に頼る黒人老女の白黒写真が目に入る。フィッツジェラルドの「過去と現在をつなぐハイウェイはなく、お互いにかみ合わず一つの方向にまともならない争点や出来ごとがひしめいている。『進歩』という言葉は『変化』に置き換えられた」という現在の教科書に対する観察はそのまま本書にもあてはまるといえよう。本書では確かに未来は変化と問題に満ちた不確かなものとして描かれている。

さらに再三述べているように、本書では様々な人種・民族集団にそれぞれ相当量の記述がなされている。しかし、本書を通読してもそうした集団が合衆国社会で歴史的にどのような位置を占め、互いにいかなる関係にあるのかは必ずしも釈然としない。インディアンの場合でも白人との交渉や紛争の経緯は述べられても、それがインディアンによってどのように解釈されたのかは十分に検討されないし、先にふれたように19世紀末の時点でタイムトンネルに入り1960年代そこから突如ぬけだすと「保留地では、条約上の権利を要求して、法廷闘争を行った」というのでは、彼らの合衆国史における存在の意味を正當に理解することは難しいだろう。⁽¹⁷⁾

確かに合衆国は多人種・多民族社会だったし、今後もそうあり続けるだろう。かつてのWASP中心史観はその事実を歪曲・隠蔽したが故に明快に合衆国史を論じ得たといえよう。本書は少なくともそうした事実を目を開いているが、残念ながら本書を通じて得られる合衆国史のイメージは端的に言って、各人種・民族集団の諸経験のモザイクであり、それらが有機的に関連づけられているとは言い難い。今や教科書はアメリカ国民とはなんなのか、その共通の歴史が存在するのかといった根本的問題にまで回帰しつつあるようにみえる。また、民主主義の概念についても同

様であろう。本書ではしばしば民主主義という語が本文や設問に登場する。しかし、注意深く読むと多くの場合、それは理念としてあるいは狭義の制度としての民主主義であって、社会の中で様々な人種・民族集団あるいは文化が存在する上で歴史的にそれがどのように機能したのかについては殆んど語られていない。この問題を拡大し国際関係にあてはめてみると、やはり世界の中で自国を相対化し位置づけるという点は弱いといえよう。

ともあれ、今後教科書がどのような形の歴史理解の変化を映し出すかは、商業レベルを超えた段階で歴史研究と歴史教育がいかなる接点を見い出せるかにかかっているといえよう。教科書制度こそちがえ、この点はわが国にも同様にあてはまる——教育への国家権力の介入という状況が存在するからこそ一層あてはまる——問題である。但し蛇足ながら、日頃わが国の抽象的で概念に縛られがちな教科書や概説書に慣れ親しんできた評者にとって、時に饒舌にすぎるとはいえ合衆国の一歴史教科書がしばしば教科書を読む楽しみを与えてくれたことは最後につけ加えておきたい。⁽¹⁰⁾

(注)

- (1) 教科書研究センター編著『社会科教科書の日米比較—日米社会科教科書プロジェクト合同報告書1981』（第一法規、1981年）、31—32頁
- (2) ヘンリー・F・グラフ著 有賀貞、松田武、中里明彦訳『アメリカⅠその人々の歴史』（全訳世界の歴史教科書シリーズ24：帝国書院1982年）、同著、有賀貞、平野孝、青木怜子訳『アメリカⅡその人々の歴史』（全訳世界の歴史教科書シリーズ25：帝国書院1982年）原題は Henry F. Graff, The Free and the Brave: The Story of the American People, 1982.
- (3) フランシス・フィッツジェラルド著 中村輝子訳『改訂版アメリカ 書きかえられた教科書の歴史』（朝日選書196：朝日新聞社1981年）73頁
- (4) 『同上』10頁
- (5) 『社会科教科書の日米比較』62頁
- (6) 『アメリカⅡ』254—56頁
- (7) 『アメリカⅠ』111頁
- (8) 『アメリカⅠ』315頁
- (9) 富田虎男著『アメリカ・インディアン史』（雄山閣1982年）57—58頁

尚、本訳書ではしばしば「酋長」なる訳語が用いられているが、その使用されてきた経緯を考えるとやはり「族長」とすべきだろう。

(10) 『アメリカⅡ』285 頁

(11) 『改訂版アメリカ』129 頁

(12) 『アメリカⅡ』281 頁

(13) Dan B. Fleming and Ronald J. Nurse, "Vietnam Revised : Are Our Textbooks Changing ?", "Social Education" 46(5) 1982, PP. 338-343.

(14) 『アメリカⅡ』287 頁

(15) 『同上』287 頁

(16) 『改訂版アメリカ』11 頁

(17) 『アメリカⅡ』285 頁

(18) ちなみに、現在合衆国で定期的に教科書の書評を行なっている雑誌に History Teacherがある。合衆国の歴史教育全般についてよくまとまっているものとしてはHazel Whitman Hertzberg, "The Teaching of History", in Michael Kammen ed. The Past Before Us: Contemporary Historical Writing in the United States, 1980, pp. 474 - 504

また本稿でとりあげたグラフ『アメリカⅡ』巻末には平野孝氏による簡便な「合衆国教育事情」が収められている。